



❁ 細々とした問題とこれからの話 ❁

もう15年以上前の話になるが、高校時代に理系文系でクラスが分かれる際、女生徒で理系を希望したのは全体の1/3程度であった。そのうちの9割が医療・看護・薬学系への進学を希望し、クラスの女子で理学部に進んだのは、私一人だったように記憶している。そして進んだ大学の授業で、防災科学技術研究所の大型降雨実験施設を見学する機会があった。学部内でも、その降雨の中に嬉々として飛び込む生徒と（もちろん雨具はお借りしたが）、雨にはうたれず端から見学する生徒の2種類があり、偏見も入るが、私を含め前者のようなタイプの生徒がこの業界に就職した気がする。

そう振り返ると、人口比で言えばこの業界に入る人間は極々少数なのだとしみじみ思う。もちろん仕事にも様々な関わり方があり、大学での所属先が就職での所属先に直結するわけでもないが、女性職員が、特に技術屋が少ないことだけは断言できると思う。

この業界に限った話でもないが、セクハラや結婚・出産に伴う離職等々、性差に起因する労働問題は未だ根強く残っていると感じている。特に現場関係については、男性職員と同じ重量の荷物が持てない（頑張って持ったりもしているが）、男性職員と同じ水位での渡河ができない、トイレに困る、着替えに困る、等々挙げればきりが無いように思う。

なお若干話が脱線するが、作業着と現場靴については、企業努力やメーカー努力で早く女性用が広まって頂きたい、と常日頃思っている。作業着については、会社の在庫の関係で男性用と女性用を両方着用したことがあるが、体のつくりの関係でやはり女性用の方が踏査の際歩きやすいように思う。靴については、店で市販されている長靴や安全靴の多くが24cm以上であり、厚手の靴下を履

かないと（人によっては履いても）ぶかぶかする。周りには、23cmや22cmサイズが欲しいという声もあるため、メーカーの方がこれを読んでいたら、ぜひ小さめの現場靴の作成・販売をご検討頂きたい。

ただこれら色々な問題について、この業界の弊害の1つに、女性職員の絶対数が少ない故、そういった問題の発生が断続的であり、問題の発生事例や解決方法が継承されにくい状況があると思う。

幸いにして、この業界に首を突っ込んでから12年、周りの人間関係には恵まれていると感じている。後輩にも恵まれているゆえに、彼女らに無用な労力は掛けたくないと思い（自分のためでもあるが）、今まで問題解決のため、労働組合や委員会や私的な面で、私なりにじたばた奔走してきたつもりである。

奔走の結果を振り返り、今になって思うのだが、組織的に状況が変わるためには最低でも5年の月日を要するようになってきている。だがそんなに日が経つと、頑張って問題解決に取り組んでも時期が過ぎてしまい、正直あまり自分や同世代への利益にはならず、実際その間にこの業界を去っていった同僚や知り合いも少なくない。ただ、後輩の利益にはなるので「まあいいか」と思っているし、今気付いていないだけで、先輩方が過去に解決して下さった問題も数多くあるのだろうとも思っている。

自分の目に見える範囲だが、自分たちの世代に比べ、ここ数年若い世代の女性技術屋率が増えた気がする。彼女たちが朗らかに働いているのを見ると私も気持ちが朗らかになるし、勝手ながら彼女たちにも、その先の世代のために頑張ってくれることを期待している。

（関 英理香・応用地質（株））

